

## ちいさな ひとびとの

西脇 純

南山大学図書館のカトリック文庫が今年20周年を迎える。中部圏唯一のカトリック総合大学である本学にとって、カトリック文庫はその特徴を体現する存在であり、近現代の日本のカトリック関連資料を中心に収集する責任を負っている。節目となる本年を心から喜び、これまで運営に携わってこられた諸先輩方や、資料を寄贈してくださった多くの方々への感謝の気持ちを新たにしたい。

奇しくも今年は、「水のいのち」「心の四季」などの合唱作品で知られる名古屋市出身の作曲家、高田三郎の生誕100年にあたる。カトリック教徒だった氏は、教会の委嘱を受け数多くの日本語聖歌を作曲した。彼の手による220曲余りの典礼聖歌作品は、いまや教会の枠を越え日本を代表する宗教音楽となって多くの合唱団に親しまれている。

2005年、高田氏の帰天5周年の機会に、南山大学は典礼聖歌の手稿譜を含む貴重な資料の寄贈をご遺族から受けた。それらは整理されカトリック文庫に収められているが、その後も高田氏の講演や聖歌指導を記録した視聴覚資料の寄贈が相次ぎ、氏の宗教音楽に関わる大変ユニークな資料群が育ちつつある。典礼聖歌は、そのほとんどが直接聖書からテキストを得ているか、聖書の内容を歌う作品であるから、近現代の日本の聖書関連資料を中心に収集してきた南山大学のカトリック文庫に、典礼聖歌の資料は、幅と奥行きとを与えたといってよいだろう。

そのような典礼聖歌のなかから一曲、『典礼聖歌』400番「ちいさな ひとびとの」を紹介させていただきたい(カトリック文庫には、この作品をも含む「合唱と管弦楽のための『典礼聖歌集』」(楽譜作成工房「ひなあられ」制作)[請求番号CAT3/196.5/1-8/v.0.3]も収められている)。

高田氏自身の作詩によるこの聖歌は、冒頭に「ちいさな ひとびとの ひとりひとりを見守ろう／ひとりひとりのなかにキリストは いる」というリフレインを置く。続いて、飢え渴く「貧しい人」や「国を出た(追われた)人」の「寒い冬」を思い、「病気の人」「牢獄の人」「みなしごたち」「捨てられた人」の苦しみを思って、彼らに手を差し伸べよう、と歌う。このテキストはマタイ福音書25章の「最後の審判」の教えを思い起こさせる。貧しい人や虐げられている人への配慮を重んじるキリストが「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と教える箇所である。高田氏も、この聖歌の解説に「(神の)み旨でなく生まれた人は一人もいないはず」と書いている(『典礼聖歌を作曲して』)。

この聖歌に込められた兄弟愛の精神を目の当たりにした微笑ましいエピソードがある。今年のGWに名古屋の男声合唱団「東海メール・クワイア」がバチカンのジューリア聖歌隊の500年祭に招待され、高田三郎の主要な典礼聖歌作品と宗教作品をローマで演奏披露することになり、同行させていただいた。演奏曲目には「ちいさな ひとびとの」も入っていた。サン・ピエトロ広場で行われた新教皇フランシスコ主司式のミサに与ったときのこと。やはり大変な人気で、席を確保する時間も含め、とにかく長丁場だった。変な話だが当然お手洗いを必要とする参列者も多く、トイレ施設の前には長蛇の列ができていた。突然、列の後方から「バンビーノ!バンビーノ!」と口々に呼ぶ声がした。人々の表情がぱッと花が咲いたような笑顔になり、保育園児くらいの小さな男の子がひとり、さかんに手拍子や歓声を浴びながら、にこにこ、でも少しばかりながら、父親らしい男性に背中を押され、列の順番を譲ってもらって前に進んでいたのである。彼への掛け声は、「がんばれよ」とか「もうすぐだ」と言ったところだろうか。些細な出来事だったが、サン・ピエトロ広場に集まる人々によって繰り広げられた、「ちいさなひと」に対するこのなんとも自然で陽気な優しさに触れて、心が温かくなった。ミサでは、教皇フランシスコの顔も豆粒ほどにしか見えなかつたが、キリスト教の精神は、こんな小さなエピソードを通してさえ十分に感ずることができた。ローマの教会での「ちいさな ひとびとの」の演奏とともに、印象深く心に残っている思い出である。

(NISHIWAKI, Jun : 人文学部教授)

座談会  
「カトリック文庫20年の歩み」

山本 和義（第10代図書館長<1988.4-1994.3>、名誉教授）  
 青山 玄（カトリック神言修道会<sup>1)</sup>司祭、名誉教授）  
 真野 和夫（元図書館事務部学術情報課第二課長）  
 栗山 義久（元教育・研究事務部図書館事務課長、学園名誉職員）  
 西脇 純（カトリック神言修道会司祭、人文学部教授）

## 司 会

森山 幹弘（第16代図書館長<2012.4- >、外国語学部教授）  
 —敬称略—

**森山** 本日の司会を担当させていただきます図書館長の森山です。南山大学は、1993年4月に南山大学図書館「カトリック文庫」を正式に開設、カトリック文庫協議会<sup>2)</sup>を発足させ、10月には南山大学図書館カトリック文庫通信『カトリコス』第1号を刊行しました。2013年はこの時から数えて20周年の記念すべき年にあたりますので、「カトリック文庫」創設にご尽力いただいた4名の方にお越しいただき、座談会「カトリック文庫20年の歩み」を開催する運びになりました。

**森山** 西脇先生には、『カトリコス』第28号の巻頭言をお願いしましたので、座談会にお招きしています。カトリック文庫協議会の現在の委員であり、神言会の神父様でもいらっしゃいます。お客様として、創設にご尽力いただきました当時の図書館長の山本先生、カトリック文庫協議会発足時の委員として発展において重要な役割を担っていただいた神言会の神父様でもある青山先生、また、図書館の事務サイドから、構想・創設に携わられたお二人の課長—当時は2課ありましたので一、真野さんと栗山さんをお招きし、この臨場感あふれるカトリック文庫室で20年を振り返りながら、歩みを紐解きつつ、また思い出に浸りつつ、座談会を進めてまいりたいと思います。

**森山** 年表によれば、1990年頃から積極的な資料収集が始まったようですが、図書館長が掛け声をかけられたのでしょうか。

**山本** 年表には「1989年:長期事業の一環として『カトリック文庫』構想」とありますが、この構想は以前からあったもので、私がゼロから立ち上げたわけではありません。カトリック関係の資料はすでに収集が始まっていたり、以前からその素地が備わっていました。当時の図書館は様々な意味で混乱状態にありましたし、教員である図書館長が事務組織である図書館を管理するのは非常に難しいことでした。そこで、他大学で図書館長を務めていた友人に、館長の心構えを尋ねたところ、「なるべく多くの時間を図書館で過ごしなさい」というアドバイスをもらいましたので、それを実践することにし、わりあい長い時間を図書館で過ごし、みんなの様子を見ていました。どうしたら図書館を良い状況にもっていくことができるか。1年目はどうしてよいか分かりませんでしたが、2年目は多少落ち着いてきたこともあり、立ち直るきっかけはあると感じていました。そこ



山本 和義氏

で、みんなが協力し合える事業を立ち上げることが必要ではないかと考え、南山大学の設立の経緯などから、すでに収集を始めていたカトリック関係の資料に注目しました。それを積極的に展開させていけば、その中で人材育成も意志の統一もはかれるのではないか、と。眞野課長が図書館にきたのがひとつの転機となり、教会のことなどいろいろ教えてもらいました。当時は各地の教会が改築の時期に入っていたり、関連の資料が次々に捨てられているような状況でしたので、今直ぐ手を打たねば、今でも遅過ぎるくらいだ、ということを眞野さんから聞いていました。そういう状況であれば早く手を打たなければならない、というのが当時の私の立場からの見方です。

**森山** コアになる事業として、カトリック資料の収集が皆に支持されていったということですね。

**山本** 私は、中国の宋の時代の文学研究者です。宋代の高級役人は「館職」と呼ばれる図書館員を兼ねた、天子の顧問的位置づけであり、学問の面から国家を支える重要な役職でした。そのようなことから、私は図書館員には事務処理だけではなく、研究者として何かを築いていく姿勢を持ってほしいと思っていました。

**眞野** 私はとにかく現場に行って、本を集めてこようという気持ちでした。当時は教会の建て替えが進み、資料散逸の危機にありましたので急ぐ必要がありました。まずは神言会の多治見修道院<sup>3)</sup>の倉庫にある古い資料をもらえないかということで、当時の森山勝文管区長に相談したところ、「いいよ」と言ってもらえたので、若い職員に運転してもらって取りにいきました。それが最初だと思います。ところが、倉庫の床は抜けている、資料は黴びている、ヘビはでてくる、といった惨憺たる状況でしたので、とにかく持てるものだけ持って図書館に帰りました。持ち帰ると「これは何だ?」と言われましたが、私は「負けん」という気持ちでした。当時の森山管区長は男子修道会の管区長会議の会長も務めていらっしゃいましたので、各教区の司教方にお話を来ていただき、東京にいらっしゃった白柳誠一枢機卿<sup>4)</sup>からお電話をいただいて資料を取りにいったこともあります。私の記録では3年間で100か所くらい回りました。もちろん仕事として行ったところもありますし、個人的な旅行のついでに寄ったところもあります。栗山課長は頭を使って古書店のカタログなどから収集し、私はとにかく体を使って、人に会って集めてくる。今集めなくては無くなってしまうというのが私の思いでした。東京の上智大学や長崎純心大学なども資料を集めましたが、「とにかく失ってはいかん」という気持ちでした。五島列島に行った時には「遅かったねえ。3年前だったら」と言われました。他の大学によって収集された後だったので。それでも、そういう情報だけでも集めようと思っていました。当時のロバート・リーマー学長がよく紹介状を書いてくださいましたので、それを持って出かけたものです。



眞野 和夫氏

眞野和夫氏の説明文

**森山** 真野さんが今お持ちになっているお手元の資料は?

**眞野** 図書館から別部署への異動が決まった際に、関連する1989年12月から1993年3月までの記録をまとめたものです。その間、本当に色々なことがありました。図書館に持ち帰った古い本からダニが湧いたと言われ、持ち帰った本が原因かどうか分かりませんが、まあ、そうなのかなあと…。数日間燻蒸しました。いずれにしても、この頃が一番よく働いた時期かなと思います。

**山本** よく働いたと思いますよ。先生方は何かと理念を語るのが好きですが、それはさて置いてスタートしました。動き始めてから、ある程度まとまりをみせたのが1993年頃からですね。危機感がありましたから、今はとにかくみんなで協力して動こう、という時期でした。結果的には、この間に集めた資料が、現在の「カトリック文庫」の基盤になっていることは間違ひありません。1993年の寄贈資料が約5,000点で、今の整理冊数が約6,700点ほどですから。様々な人が力を惜しまず協力してくれました。

**青山** 私は、自分が持っていた、現在の『カトリック新聞』<sup>5)</sup>の前身である『日本カトリック新聞』や『カトリックタイムズ』を寄贈しました。当時は原本を持っていたのは本学だけで、非常に価値がありました。図書館できちんと整理してもらったので感謝しています。よくコピーを取らせてもらって利用しました。

**森山** 1989年の「カトリック文庫」の構想の段階で、資料はかなり収集されていたのでしょうか。

**青山** かなり収集されていましたが、たびたび捨てられたんです。大学創立当時はまだ日本が貧しい時代でした。大学をつくるにあたり、2万冊程度の本を準備しなければならないということでしたが、大学にはそれを上回る本がありました。工藤謙先生<sup>6)</sup>のお父さんがカトリック雑誌『聲』<sup>7)</sup>を出版していた三才社の編集者だった関係で、戦災を逃れた麻布の自宅に蔵書がかなりありました。そのほとんどがカトリック関係の資料で、明治期から出版されていた『聲』もたくさんあり、それらの資料が工藤先生を通じて本学図書館に寄贈されました。

ところが、大学が始まって、まだ進駐軍がいた頃ですが、アロイジオ・パッヘ初代学長が図書館長事務取扱として、幕末の黒船のペリー提督の孫娘にあたる、アメリカ人エヴァ・ペリー女史<sup>8)</sup>を招きました。彼女には古い資料は不要というアメリカ式の考え方があり、1952年頃に古い資料がたくさん捨てられたんです。



青山 玄氏

松風誠人氏<sup>9)</sup>は、昭和の初期からカトリック中央出版部で働いていた編集者で、出版社で持っていた『カトリックタイムズ』などの資料は戦災で焼けてしまったのですが、個人で持っていたカトリック資料を晩年に私に寄贈してくれましたので、それを神言神学院<sup>10)</sup>に保管しました。とにかく捨てられる可能性がありましたので、大切なものは個人で持っていました。松風氏は1950年に出版社が閉鎖された後、本学園事務職員として勤務することになりました。

また、1966年には多治見修道院からめぼしい資料をもらってきてましたので、眞野さんが多治見に行った時の資料は、その残りだったと思います(笑)。しかし、神言神学院に置いていた資料も後で捨てられてしまうんです。神言神学院の当時の書庫は狭くて、当時の神言神学院の図書館長が自分の専門の聖書学関係資料を入れる場所を確保するために、多治見修道院からもらったものだけでなく、平凡社の古い百科大事典などもそっくり捨ててしまいました。

**山本** ペリーさんは、私にとっては大変価値がある漢籍関係の資料も、古いということで捨ててしまったんです(笑)。

**青山** 1980年代に入って、確かこの部屋(カトリック文庫室)で、栗山さんからカトリックの資料を置きたいという話を聞きました。私も少し古い資料を持ち込んで、小さな山ができるくらいの古いカトリック関連の資料があったように思います。その後、1990年代後半、私が退職する頃に図書館にたくさんの資料を寄贈しました。

**栗山** 図書館が少し落ち着いてきた頃、ちょうど図書館のシステム化が進み、検索システム講習会の開催、図書館報『デュナミス』<sup>11)</sup>の刊行など、学生に向けての働きかけや、外部への情報発信に図書館が主体的に取り組み始めました。また、収集もそれまでは教員の注文を受けるか、せいぜい学生用の資料を選書するだけでしたが、この頃、図書館内でまとまった予算を使って基本資料の選書をする委員会ができ、図書館員がコレクション作りにかかわっていくようになりました。

さらに日本カトリック大学連盟<sup>12)</sup>の図書館協議会が発足し、共同で宗教関係の目録を作成したり、勉強会を開催して情報交換したり、カトリック大学の使命といった大学のアイデンティティを見つめ直す時期と重なりました。図書館員が主体となって積極的にカトリック関係資料を収集し、それを「カトリック文庫」として独立させることができ、大学内でもある程度理解が得られるような時代が来たのだと思います。

**山本** 図書館のひとつの節目だったと思います。

**青山** 上智大学には、図書館とは別に「カトリック文庫」という一室があったと思います。私は栗山さんから「カトリック文庫」をつくりたいという話を聞いたので、自分の部屋に残っていた資料を持っていきました。正式には後で手続きされたと思いますが、その頃には「カトリック文庫」という言葉を使っていたように思います。

**森山** 1980年代は黎明期といった時代で、カトリック関係の資料を青山先生が図書館に持ってこられ、山本先生がひとつのプロジェクトとして核をつくられたということですね。そして、1994年に「カトリック文庫」資料収集方

針が定められました。この頃にどのような資料を収集していくかについてある程度の合意が得られ、さらなる収集・整理を進めていくということになったようですが、収集の思い出や、印象に残っている資料などはありませんか。

**山本** その頃、私はすでに図書館を離っていましたが、リーマー学長の他、学内や学外に協力的な人々が大勢いらっしゃったことに今でも感謝の気持ちでいっぱいです。一方、それにふさわしいものを築かなければいけないという責任も感じていました。その点で、近頃の『カトリコス』の内容は素晴らしいと思います。私が期待していた図書館の姿が現われています。ただ、以前発行していた『図書館紀要』が休刊したことは私にとって非常にショックでした。南山大学図書館の資料の核として、「カトリック文庫」を広報にも積極的に利用なさったらよいと思います。

**眞野** 雑誌『聖母の騎士』<sup>13)</sup>が印象に残っています。これは主税町(ちからまち:愛知県名古屋市)教会にあったものをもらったんです。手に入れた時は嬉しかった。数号欠けていますが、創刊号から揃っているのは大変珍しい。私の知るところでは、本学の他には、函館にあるトラピスト修道院と長崎の聖母の騎士社くらいしかありません。欠けている号を全部揃えていただけたら有難いです。また、毛馬内(けまない:秋田県鹿角市)のカトリック教会からもらった資料は、神学校の図書室に入れた方がよいということで、そちらに入れたものもあります。当時、神言神学院図書室、(南山大学図書館)キリスト教コーナー、(南山大学図書館)カトリック文庫、この3つの柱がそろえば、この地区では相当なコレクションになり、社会にも利用してもらえるという構想を持っていました。

**栗山** 最初はとりあえず集めるだけで、目録もとておらず、利用者がきてもなかなか使える状態ではありませんでした。90年代の初めに、日本カトリック大学連盟の図書館協議会でエリザベト音楽大学を訪問した際に、図書館長だったエヴァルト・ヘンゼラー先生に呼ばれて、聖歌について論文を書いていたのですがなかなか資料が集まらない、南山に関連の資料がないかといった相談を受けました。山になっていた資料の中を探し回り、報告すると、ヘンゼラー先生ご自身が本学に見にいらっしゃいました。また、聖歌集を『カトリコス』に紹介したところ、名古屋市立大学の加藤いつみ先生が明治の唱歌の起源について調べに来られました。その際ヘンゼラー先生を紹介したところ、その後お会いしてお互いに連絡を取り合うようになられたと聞いています。資料が人と人を結びつけたということで印象に残っています。これからもここにある資料についてもっと発信していくことによって、そういった関係を築いていくことができるのではないかでしょうか。



栗山 義久氏

**森山** 実際に、山になっていた資料が使えるようになったのはいつ頃からでしょうか。

(関谷図書館事務課長) 寄贈された資料の整理は、本当に細々でしたので、かなり長い間山になっていました。私が2010年に人事異動で図書館に戻ってきた時、まだ山の状態でした。これを優先的に整理し、1年かけて滞貯状態をほぼなくしました。ただ、予算が付いて買った資料だけはそれまでもなんとか整理されていたようです。



西脇 純氏

**西脇** 大変なご苦労があったという貴重なお話を伺うとともに、「カトリック文庫」の存在の意義についても学ぶことができました。「カトリック文庫」の収集方針が、「明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等(聖書・祈祷書・聖歌集・要理書...)」の順番に記されていますが、それは寄贈された中にそのような資料が多くあり、それらを土台に増やしていこうという発想だったのでしょうか。それとも本学の設置母体の修道会「神言会」のミッション「神のみ言葉を宣べ伝え、福音の道をあかしする」に基づいて、このような収集方針になったのでしょうか。特に和訳聖書を多く収集し、また和訳聖書の展示会や講演会を行ったりと、聖書関連

のものを集めるという特徴があるように思うのですが、実際はどうだったのでしょうか。『カトリコス』の第7号には最初の和訳聖書の著者ギュツラフに日本語を教えた尾張漂民“岩吉・久吉・音吉”<sup>14)</sup>の3人の漁師のことが書かれており、イエスの最初の弟子たちも漁師だったのでおもしろいなあと思いました。

**栗山** 他大学とくらべると後発で始めたことから、貴重書を集めることは、もう少し近い時代のところで失われていく危険のある資料を集めようということだったと思います。また実際の収集活動で集まってきた資料も、大正のものも少し混じっていましたが、昭和以降の資料が大半でした。後から思い返してみると、古書店にも、国立国会図書館にも入っていないような資料(使い捨ての小冊子など)を保存できたことはすごく意味があったと思います。古書カタログにもカトリック関係の資料は少なく、近代のキリスト教に遡ることができるものであれば、プロテスタント資料、仏教関係の資料(排耶書など)も購入しました。聖書は聖典として明確に訴えられる資料であり、特に木版聖書は見栄えもよいので、最初の頃は聖書を中心に展示会を行ったのだと思います。

**山本** 1994年に収集方針が定められる前も、文章化されてはいませんでしたが、漠然とこのような方向へという道筋はあったと思います。

**森山** 最後に「カトリック文庫」の現状を踏まえたうえで、今後の展望やアドバイスをいただけませんでしょうか。

**山本** 情報を発信していくこと、人間関係を大切にしていくことが大事です。慶應義塾大学斯道文庫の大沼晴暉先生と高橋智先生に本学所蔵の和漢書の目録を作成していただき、『図書館紀要』第6号に掲載しました。先生方とは今も交流があります。もちろん従来培われた人間関係がありますが、常に新しいメンバーを巻き込んで人間関係を築いていく努力をし、将来に向けての人的関係を積極的に培っていくことが大切だと思います。



森山 幹弘氏

**青山** 「カトリック文庫」の資料を読んでもらうには、人間関係が大事だと思います。読んでもらってこそ意味があり、資料が活かされます。

**真野** 心残りは、日本全国をまわりきれなかったということ。四国・中国地区など手つかずのところもあります。少子化の影響もあると思いますが、日本人の司祭が少くなり、若い外国人司祭が増えていますので、教会に残っている古い日本語資料が捨てられてしまう可能性があります。まだまだ集められる資料があるのでないでしょうか。例えば、長崎教区ではいくつかの教会の建て替えが進んでいると聞きましたので、見に行く機会があればと思います。

**森山** 西脇先生に長崎へ行っていただき、資料を集めていただいたらいいかがでしょう。(笑)

**栗山** 職員が異動すると、人間関係が途切れてしまうこともあります。カトリック文庫協議会に外部の人をもっと取り込むとか、神言会を通じて他の教会ともネットワークを作るなど、もう少し組織的な太いパイプを作ることができればと思います。

**青山** 図書館員が興味を持って情報を発信していくと、読んでみようか、という人がでてくるのではないですか。若者がどんどん本から離れて行って、集めても利用されなくなるのではないか心配です。宝の持ち腐れになってしまいます。

**森山** 研究者にとっては貴重な資料ですので、数は多くありませんが興味を持って訪ねて来られる方はいらっしゃいます。私は、栗山さんが90年代の初めに南山大学のアイデンティティとして「カトリック文庫」を作られたという話が印象的でした。世の中は、インターネットでなんでも検索できるようになって、ペーパーレスになり、将来的には電子的な仮想空間の中で多くの本が読めるようになるかもしれません、国立国会図書館にもどこにもないも

のを我々が持っている、この分野だったら南山大学にあるという資料を持つことが重要だと思います。電子化が進んでいく中、図書館で「集める」としたら、その分野ではないでしょうか。それが図書館が生き残っていく道だと思います。本日はお暑い中、『カトリコス』座談会にお集まりいただきありがとうございました。



2013年5月30日 南山大学名古屋図書館カトリック文庫室にて

## 用語解説

### 1) 神言修道会(神言会)

南山学園の設置母体であるカトリック修道会。神言会は、1907年に日本での布教を開始し、当初は秋田、山形、新潟、富山、石川、福井県を新潟教区とし、1922年には愛知、岐阜、富山、石川、福井を名古屋教区とした。

1930年には、現在多くの人々に親しまれている多治見修道院を設立し、管区本部を置いたが、後に管区本部は名古屋に移り、神言神学院も名古屋に設立された。1966年には神言神学院が現在の名古屋市昭和区八雲町に移転し、海外の神学生の受け入れや、日本人神学生の海外研修、留学など養成段階における国際化が進み、より国際的な管区に成長した。現在日本管区では130人以上の会員が働いているが、そのうちの半数が外国籍の宣教師で、国際宣教修道会の特色を活かした活動を行っている。

<http://www.svdjpn.com/>

### 2) 南山大学図書館カトリック文庫協議会

「カトリック文庫」資料を継続的に収集管理し、研究者等の利用に積極的に供するなど、運営上の適切な助言を求める機関として、1993年4月に発足した。図書館長を長として、本学教員・職員の中から選ばれた委員によって構成される。

### 3) 多治見修道院

岐阜県多治見市にある神言修道院は、1930年カトリック神言修道会宣教師ヨゼフ・モール神父によって、修道生活と邦人会員の養成を目的に、日本管区の中央修道院として設立された。修道院の建物は、地上3階、地下1階の木造建築で、建坪1千坪、ぶどう畠は3千坪、総面積1万8千坪に及ぶ。最初の約30年間は神言修道会の日本における本部としての機能を果たし、当時は、外国からの宣教師が日本語の勉強をしながら修道生活を送り、キリスト教の布教を行っていた。その後宣教活動も拡大し、神言会が設立した南山学園における教育活動の拡張に伴い、宣教活動の拠点は名古屋に移された。現在は南山大学で勉強している神学生が一年間の修練をする場所として、修練と黙想の生活が続けられている。

<http://www15.ocn.ne.jp/~svd/>

### 4) 白柳誠一(しらやなぎ せいいち、1928-2009)

カトリック教会の司祭、枢機卿。1994年に日本人で4人目の枢機卿に親任された。世界宗教者平和会議日本委員会理事長、日本宗教連盟理事長などもつとめ、宗教対話や平和活動に熱心であった。

### 5) 『カトリック新聞』

1921年前身の『公教青年会会報』(月刊)創刊、1923年には『公教青年時報』(月2回)(発行:公教青年会)、第9号から『カトリックタイムス』(月2回)、1931年第273号より『日本カトリック新聞』(発行:カトリック中央出版部)と改題。これらの号数を継承し、第299号より『カトリック新聞』となる。その後、用紙不足などによる休刊を経て、1946年第969号より『カトリック新聞』(発行:中央出版社)として復刊。現在は、日本のカトリック教会が発行する唯一の週刊全国紙としてカトリック新聞社より発行されている。『カトリコス』第2号(1994年7月発行)に詳しい。

### 6) 工藤肅(くどう すすむ、1898—1998)

1945年、終戦の年に、神言会パッヘ神父(本学初代学長)から、南山外国語専門学校(本学の前身)設立のために助力を要請され、東京から名古屋に移り住み、本学開学後は文学部教授に就任。仏語学仏文学科における教育、その他学内の要職を歴任し、1971年定年による退職。本学名誉教授。

### 7) 雑誌『聲』

1891年に京都の木鐸社より創刊。日本のカトリックを代表する雑誌で、明治・大正・昭和初期には日本カトリック界の総合情報文化雑誌の性格を示していた。『カトリコス』第17号(2002年11月発行)および18号(2003年4月発行)に詳しい。

### 8) エヴァ・ペリー(PERRY, Eva M.)

初代大沢章館長(1949.6~1950.3)の後、第2代テオドール・ヴァンザイル図書館長(1952.4~1963.7)の任期中に至る1951年9月から1953年5月まで図書館長事務取扱として南山大学図書館に勤務。アメリカ的図書館運営(図書館への資料集中管理、延滞料の徴収、海外直接発注、辞書体目録の編成)を導入したと言われている。

### 9) 松風誠人(まつかぜ まさと、1905-1994)

月刊誌『聲』、週刊『日本カトリック新聞』『カトリック新聞』等の編集に携わった後、1950年南山学園に入職。1970年定年による退職。学園名誉職員。

### 10) 神言神学院

南山大学名古屋キャンパスに隣接し、神言修道会が直接経営するカトリック司祭・修道者の教育、要請をする機関である教皇庁立神言院。神言神学院図書室に所蔵する資料も南山大学OPACで検索することが可能。

### 11) 南山大学図書館報『デュナミス』

1988年4月創刊以来、第64号を数える。第8号(1991年1月発行)よりタイトルを、ギリシャ語で「力」「可能性」を表す『デュナミス』とする。

<http://office.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/dynamis/dyuna-midashi.htm>

### 12) 日本カトリック大学連盟

日本カトリック大学連盟は、1975年日本国内のカトリック大学11校によって創設された。その後、加盟校が増加し、現在20大学によって組織されている。連盟では、日本におけるカトリック大学間の協力関係を推進し、カトリック教育の使命達成のために活動を行っている。

<http://www.catholic-u.jp/>

### 13) 雑誌『聖母の騎士』

月刊誌『聖母の騎士』はマキシミリアノ・コルベ神父が、日本の国民にキリストの福音と聖母マリアの愛を伝えるために1930年に創刊。創刊号の表紙には「無原罪の聖母の騎士」の誌名とともに、両手をさしのべている無原罪の聖母が画かれている。創刊号と第2号の発行は長崎カトリック教報社(長崎司教館)で、『長崎カトリック教報』第38号付録として配付された。『聖母の騎士』がコルベ神父独自の印刷機で刷られ始めたのは、第3号からで、この号から印刷所も発行所も大浦天主堂下の仮修道院となり、刷り上がった『聖母の騎士』を修道士たちが、長崎の街へ出て配り、やがて読者が日本全国に広がっていった。

### 14) 岩吉・久吉・音吉

愛知県知多郡美浜町小野浦の漁師、音吉・久吉・岩吉は、1832(天保3)年10月11日の航海中に船が操縦不能となり、漂流民となってアメリカ西海岸に流れ着いた。ヨハネその後、彼らは、マカオでドイツ生まれの宣教師カール・ギュツラフに会い、聖書の日本語翻訳を手伝った。その翻訳『約翰福音之傳』完成の23年後つまり1859年に、プロテスタントの宣教師ヘボンが、その聖書を持って宣教のために日本に上陸した。このヘボンこそ「ヘボン式ローマ字」を考案した人物である。

## カトリック文庫年表

年	ことがら	図書館長 (敬称略)
1989	長期事業の一環として「カトリック文庫」構想 *図書館では構想を実現するため図書館予算の中にカトリック資料費を計上し、明治期刊行の聖書・聖歌集等を古書店から入手することによる資料の構築を図った。	山本 和義
1990	「カトリック文庫」として積極的な収集を開始 *ザビエル研究コレクション購入 ザビエル研究の権威者ゲオルク・シュールハマーの主要著作をはじめ、16世紀末葉から20世紀前半まで200点を超える世界各地の史料文献コレクション	山本 和義
1991	教会・修道会と密接に情報交換を行いながら収集活動を展開 *1991年から1993年が収集活動を展開したピーク。関係機関への協力依頼は31教会、カトリック16教区司教、43修道・宣教会(男子)、121女子修道会に及ぶ。これと併行して、関係者からの情報入手・紹介(特に当時の神言修道会森山管区長、相馬名古屋司教には頻繁に報告・相談に赴き、助言を得るのみでなく管区長・総長会議、名古屋教区宣教司牧評議会等の場で協力要請をしていただくななど多大な協力を得た)を経て、図書館員の現地訪問は、長崎、福江、福岡、津、多治見、岐阜、金沢、長野、東京、横浜、新潟、酒田、鶴岡、秋田、盛岡、仙台など17都県、70余の司教館、修道会、教会、個人に及んだ。	山本 和義
1992	図書館事務部内に「カトリック文庫」プロジェクト発足 *収書活動、整理・分類基準の策定に取り組む。 「聖書を中心としたキリスト教関係資料展」開催(10月31日～11月7日)	山本 和義
1993	南山大学図書館「カトリック文庫」を正式に設置 寄贈資料数：約5,000点 「カトリック文庫」協議会を発足 *専門的な見地からの指導・助言を得る機関として図書館長を長として、教職員、事務職員を構成員とする。 『カトリック文庫通信：カトリコス』第1号発行(年2回)	山本 和義
1996	「南山大学図書館『カトリック文庫』について：過去・現在・未来」講演(10月24日) *日本カトリック大学連盟図書館協議会実務研究会にて報告	1995- 美濃部 重克
	「和訳聖書について：異文化との出会いの視点から」講演(10月25日) *日本カトリック大学連盟図書館協議会実務研究会にて報告	美濃部 重克
	「和訳聖書展：南山大学図書館カトリック文庫所蔵資料より」開催 (10月28日～11月8日) *本学所蔵の明治期の和訳聖書のヘボン「新約聖書約翰傳」(1872年[米國聖書會社]出版)など約45点のほか、聖書の解説・翻訳者・南山大学カトリック文庫紹介パネル、ミサ聖祭で使用する聖杯(カリス)・祭服・聖体顕示台等の資料を展示	美濃部 重克
1999	「カトリック文庫」プロジェクトを「カトリック文庫」委員会に名称変更	1998- 浜名 優美
2002	『カトリック文庫通信：カトリコス』発行を年1回に変更	2002- 大森 正樹
2004	カトリック作曲家高田三郎氏遺品群寄贈 *手稿譜、豊中混声合唱団演奏会・講習会テープ・ビデオ、典礼聖歌関連の論文など	大森 正樹
2005	名古屋聖霊短期大学所蔵『グーテンベルク聖書』を瀬戸図書館に設置 *同短期大学閉学に伴い、大学に移管(マゼラン版、本体2巻、解説2巻、1984年復刊)	大森 正樹
2006	整理冊数：2,563点	2006- 水谷 重秋
2011	未整理のまま保管されていた寄贈資料の整理完了 「カトリック文庫」室を地下1階にリニューアル 整理冊数：6,606点	2010- 細谷 博
2013	整理冊数：6,682点	2012- 森山 幹弘

## 『カトリック文庫通信 カトリコス』内容一覧

年度	号数	巻頭言	執筆者(敬称略・職名は当時のもの)	内容
1993	1	「カトリック文庫通信」発刊にあたって	山本 和義(図書館長・文学部教授)	「カトリック文庫」あれこれ
1994	2	南山大学図書館カトリック文庫の所蔵図書・雑誌について	青山 玄(文学部教授)	「カトリック文庫」整理基準の作成について
	3	マイ クリスチャン ヒーロー	ロバート・リーマー (外国語学部教授)	聖歌集について
1995	4	ある図書館	ウォルター・ダンフィー (文学部助教授)	カトリック文庫見学記(長崎純心大学・純心女子短期大学)
	5	南インドの聖堂の祭り	杉本 良男 (国立民族学博物館助教授)	漢訳聖書—ロバート・モリソンの足跡—
1996	6	カトリコス、図書館、大学の関係	ハンス ユーゲン・マルクス (学長・文学部教授)	聖書和訳の歴史
	7	カトリックの典礼とグレゴリオ聖歌	濱口 吉隆(文学部教授)	キリストian他界觀とその日本における意義 1996年度日本カトリック大学連盟 図書館協議会実務研究会報告(南山大学) 聖書和訳の歴史
	8	がんばってはいけません	久松 英二(文学部助教授)	聖書和訳の歴史 資料紹介 クラセ『日本教会史』初版
1997	9	ダイアナさんとウエストミンスター大修道院	鳥巣 義文(文学部助教授)	「カトリック文庫」雰感 1997年度日本カトリック大学連盟 図書館協議会実務研究会報告(ノートルダム女子大学)
	10	神学の自由と出版の使命	石脇 慶總 (前宗教文化研究所第二種研究所員)	布教用要理解説図版について 日本におけるカトリック要理の歴史を辿る(連載第1回)
1998	11	「大航海時代の語学書」成立の背景	丸山 徹(文学部教授)	カトリック文庫に想う 鈴木 高明(藤女子大学図書館) 聖フランシスコ・ザビエル渡来450周年記念 国際シンポジウム'98に参加して(上智大学) 1998年度日本カトリック大学連盟 図書館協議会実務研究会報告(英知大学)
	12	ミニュとの出会い	岡地 稔(文学部教授)	日本カトリック布教史と出版活動—幕末から昭和まで— 資料紹介『LIBRO DE HORAS DE LOS MEDICIS』 Madrid : Testimonio, 1994
	13	「義認の教理についての共同宣言」の調印—500年近い論争に終止符か—	リチャード・ジップル(文学部教授)	三河地方の殉教者 五味 嶽(名東カトリック教会) 聖フランシスコ・ザビエル渡来450周年記念 国際シンポジウム'99に参加して(上智大学) 1999年度日本カトリック大学連盟 図書館協議会実務研究会報告(白百合女子大学)
2000	14	記憶と和解—教会と過去の過ち	江川 憲(人文学部教授)	日本におけるカトリック要理の歴史を辿る(連載第2回) Relógio Litúrgico—典礼時計
	15	「カトリックの聖書」?	熊木 建郎(人文学部教授)	視聴覚メディアによるキリスト教宣教 —音響映像グループメディアセンター26年の歩み— 東京大聖書展を見学して
2001	16	ヴィヴァリウム—古代ギリシア・ローマの遺産を守った図書館—	長倉 久子(人文学部教授)	羅典、羅甸、羅天、拉丁、拉典、拉甸、刺甸、刺葡、刺斑、らてん、ラテン語(一)—わが國におけるカトリック教會による西洋學事始めの一端—渡邊 雅弘(愛知教育大学) 日本における大正・昭和初期のカトリック社会事業—その特徴と意義について—
2002	17	不便な図書館も好き	井上 淳(人文学部助教授)	カトリック教会 随想 上條 光子(卒業生) 明治期におけるカトリック逐次刊行物の流れについて
2003	18	書物を食べる?	大森 正樹(人文学部教授)	大正・昭和期におけるカトリック逐次刊行物の流れについて
2004	19	チュービンゲン大学での留学生活から	山田 望(総合政策学部教授)	高田三郎氏について—音楽と人生
2005	20	古代アレキサンドリアの図書館を想う	岡崎 才藏(人文学部教授)	典礼聖歌—主としてその歴史について
2006	21	聖書朗読の時間	西脇 良(総合政策学部助教授)	グレゴリオ聖歌の成り立ちとその歴史
2007	22	打ち捨てられたものへの眼差しを問い直す	柳澤 田実(人文学部講師)	南山大学図書館が所蔵するキリスト教関係逐次刊行物について
2008	23	ロバート・ケネディ:成長する魂	三好 千春(人文学部准教授)	ヘボンと日本人の神觀について
2009	24	聖歌写本との出会い	西脇 純(人文学部准教授)	レオナルド・フジタの生涯—美と信仰の融合—
2010	25	本の中の本	柊 曜生(人文学部教授)	高田三郎のあゆみ—没後10年を記念して—
2011	26	中世の聖堂における彫刻とステンドグラスの関係	木俣 元一 (名古屋大学大学院文学研究科教授)	ステンドグラスと光
2012	27	南山大学の『受難』を観て	ミカエル・カルマノ (学長・人文学部教授)	今、あらためて宗教劇を考える—受難劇を中心に—



## 資料紹介:『さいはひのおとづれ わらべてひきのとひこたへ』

石田 昌久



### 0. はじめに

南山大学図書館「カトリック文庫」は、カトリックに限らず各教派の和訳聖書<sup>1)</sup>や他の宗教等から批判的に扱われた排耶書など、特色あるキリスト教関係史資料を幅広く収集している。「カトリック文庫」開設20周年にあたり、本稿では、「近代日本におけるキリスト教史を研究する国内外の研究者に資する」という文庫の目的を踏まえて、近年入手した文献のなかで特に貴重と思われるもののひとつである『さいはひのおとづれ わらべてひきのとひこたへ』を紹介したい。

### 1. 本書の成立と諸版との比較

本資料の書名を題簽のまま記せば、『さいはひのおとづれ わらべてひきのとひこたへ』となる。1丁目冒頭(内題)には『さいはひのおとづれわらべ手びきのとひこたへ』とあり、若干の相違が見受けられる。作者名、出版年を示す表記は無いが<sup>2)</sup>、さまざまな史資料により、ヘボン(HEPBURN, James Curtis, 1815-1911)と奥野昌綱(1823-1910)の手により1873(明治6)年頃に書かれたものとされている。ただし、1872(明治5)年には既に使用されていたことを匂わせる文献の記述もあり<sup>3)</sup>、出版年を[1871]としている版も存在する。“ヘボン著(編)、奥野昌綱訳”などとされるが、実際、ヘボンの講話・説教を奥野が文字に起こして版下としたようである<sup>4)</sup>。出版地は横浜だと思われるが、出版者名を含めて記載が無いため断定はできない。形態は、和装、25丁、18cm弱の木版摺りである。それ以外では、旧蔵者名と思しき朱印が2箇所ある他、表紙裏の見返し右下に屋号らしき朱印(虫食い等のため判読不可)があり、表紙の裏や裏表紙に墨などによる多くの書入れがある。なお、1889(明治22)年には『初学問答』と書名を変えて改訂版が出されている。



同書名のものをOPACや冊子目録等で調べてみたが、諸版あるものの、国内で現存するのは国立国会図書館、明治学院大学、同志社大学など、わずかに10点前後だと思われる。本書の入手先であるその道25年の古書店主も初見であり、彼の師匠にあたる東京・神田のキリスト教専門古書店の店主ですら古書目録に掲載したことになかったということであるから、50年に一度出るか出ないかの代物とも言え、本書の希少価値がうかがわれる。残念なことに、表紙から4丁目かけて中ほどに孔が開き、さらに2丁目下隅に欠損部分があり、若干の欠字を生じさせている。しかし、このことによって金銭的価値が減じられるとしても、その資料的価値が損なわれることは無かろう。

次に一他の現物と校合しているわけではないので推測の域を出ないが一、幸いにして横浜市立図書館所蔵のもの(以下、Y)が電子化されPDFファイルにてWebページ上<sup>5)</sup>で提供されているので、これと比較することで詳細な異同を見ていきたい<sup>6)</sup>。まず題簽は本学のもの(以下、N)が表紙の左上に貼付してあるのに対して、Yは表紙の真ん中に直接印刷されているように見える。また1丁ずつ繰ってゆくと、Nの方がYよりも印刷部分の上・下(天・地)に大きく余白が取ってあり、それが紙(形態)の大きさの違いに結びついているようである(N: 18cm、Y: 16cm)。さらにNの25丁目の片側が裏表紙と貼り合わされていて、丁数の違いの理由かとも思われる。総じて言えば、謄写版は一旦脇に置くとして、Yに近い26丁・16-17cmのものと、Nに近い25丁・16-19cmの、少なくとも2ないし3種類が存在することがわかる。あとは書誌による比較であるため心許無いが、Yは国立国会図書館所蔵のものや明治学院大学の[1873]版に近く、Nは同志社大学所蔵のものや明治学院大学の[1871]版に近いと推測される。ただし、Yは25丁、裏表紙左下に「横濱 海岸通 耶蘇教書肆 百六十七番」の文字が見られ、「耶蘇教書肆」が出版者として捉えられている<sup>7)</sup>。また明治学院大学の[1873]版は出版者として「大和屋誠太

郎」と記載されているなど、細かな相違点が散見される。今のところの比較としてはこれが限界で、やはり現物の校合が待たれる。

## 2. ヘボンと奥野昌綱

ヘボンは言わずと知れたヘボン式ローマ字のヘボンである。1815年アメリカ合衆国に生まれて1859年に布教のため来日し、日本語を研究、英和辞典の編集に努めて『和英語林集成』(1867)を著したことで知られているが、新約聖書・旧約聖書の翻訳に長く力を注ぎ、さまざまな和訳聖書を世に送り出している。それ以外にも『真理易知』(1867)、『三要文』(1871~72?)、『十字架のものがたり』(1872~74?)などの宣教用小冊子を上梓しており、本書はそのうちのひとつである。また医師でもあるヘボンは、施療所を開設(1861)して多くの患者を診療している。同時に妻・クララ(LEETE, Clara Mary, 1818-1906)が1863年に開いた英学塾(ヘボン塾)を助けて日本人の教育に尽力し、その後の明治期に活躍する人材を多く輩出している。

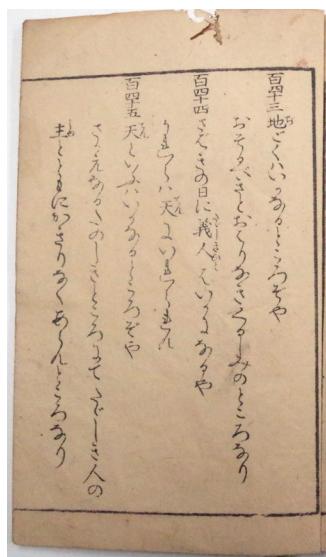
一方、奥野昌綱は1823年に江戸で幕臣の子として生まれ、明治維新では幕府側に付いている。ところが縁あって1871(明治4)年にヘボンの日本語教師となり、翻訳などに協力するうちに感化されて思想・信条を変えるに至り、翌1872(明治5)年に洗礼を受けることとなる。またヘボンの助手として、付かず離れずの信頼関係を保ち続け、数々のキリスト教関連文献の出版に精力を傾けており、『真理易知』の改訂版(1882)をはじめ、『三要文』、『十字架のものがたり』の和訳にも携わっている。剣術に秀でていたばかりでなく、神道、仏教、儒教などの古典・哲学を深く理解し、国漢、書画、音曲(後の讃美歌編纂・創作に役立っている)に通じていたことが、それらの出版に役立ったことは言うまでもない。むしろ、奥野の文化的素養・日本語能力あってこそ本書は成立したとも言えよう。事実、ヘボン・奥野等が手掛けた和訳聖書などは正確かつ優雅な日本語として名文の誉れ高く、後ちまでそのまま変わらず受け継がれて使われた訳文も少なくない<sup>9)</sup>。

## 3. 本書成立の事情・背景

ここで本書が成立した1873(明治6)年頃の日本の状況を一瞥しておきたい。遡る1854年に日米和親条約、1858年に日米修好通商条約が締結されて、多くの外国人宣教師が来日し、横浜に集まるようになった。ヘボンもそのうちのひとりである。当時の日本は、まだ辻にキリスト教禁制の高札が立ち、攘夷が叫ばれて外国人に危害を与えるとする浪人が横行しており、日本人の方から気安く近づける雰囲気ではなかった。その一方で、鎖国時代に西洋からもたらされる学問と言えば長崎経由の蘭学が主であったが、横浜開港以来、この蘭学が次第に英学に取って代わられるようになっていく。進取的な若者などは、横浜での英学(英語)の勉学を志すようになり、幕府も一時期(1862-1863)、ヘボンのもとに9名の学生を預け、英語を含めた学問を学ばせているほどである。ちょうどこの頃(1861)並行して、ヘボンの妻・クララはアメリカで教育に携わった経験を活かして自宅で英語の授業を始めた。療養を理由に一旦アメリカへ帰国するが、再来日した1863年にヘボン塾を開設している。<sup>10)</sup>

こうした中で、もともと宣教師として来日したヘボンにとっては、施療所や日曜学校<sup>11)</sup>、英学塾などで用いる初心者向けの宣教用小冊子が必要となり、日曜学校で使用する子ども用の教材として、145条から成る教理問答書である本書を奥野に指示してつくらせた。本書が出版された頃の1873(明治6)年に、明治政府により切支丹禁制の高札が撤去され、日曜学校やキリスト教主義学校が徐々に増えていく契機となった。しかしそれは、不平等な条約改正のため横浜や東京辺りの人目に立つ箇所のみを撤去するという、形式的な対応に過ぎなかった。つまり一般の人々は、外国人およびキリスト教に対して、警戒心を緩める気持ちにはまだまだなれなかった。そのため、本書の版本の彫り師を探すのに奥野は大変な苦労をしている。キリスト教禁教下の秘密裏の出版ということである。

本書が使用された日曜学校は、初めは外国人子女のみだったのが、次第に英学塾や一般の子どもまで参加するようになっていた。本書は、改題改訂版『初学問答』を含めて多くの日曜学校で長く使用されたが、教師不足の事情からキリスト教主義学校に通う子どもが日曜学校で教師役にもなっており、その点からも重宝されたのではないだろうか。本書の内容は、文字が読める者なら誰でも理解可能のように平易かつ簡潔であり、事実上のキリスト教禁制下で、しかも日曜学校の搖籃期としては、子どもたちがキリスト教の教えへと初めの一歩を



踏み出すには格好の書物であったと思われる。

#### 4. 他の要理問答書(カテキズム、教理問答書、信仰問答書)との比較

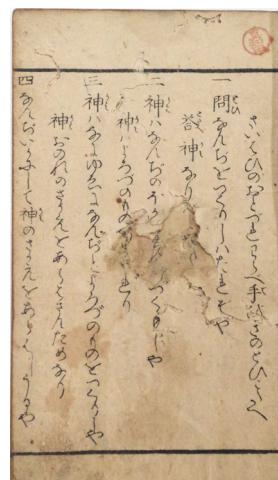
本書は、日本で最初の子ども用要理(教理)問答書だと言われている。要理書(カテキズム)はほとんどが問答形式で記述され、信仰の初步を教えるためのものである。そればかりでなく、聖書の教理をどのように要約して順序立てて示すかという点に特徴があらわれる。

プロテスタントでは基本的に、使徒信条、十戒、主の祈り(これらを合わせて三要文[さんようもん]と言う)に聖礼典を合わせた構成となっている。著名な各カテキズムの内容・順序を示せば、

- ・ルターの大小教理問答書(1529)：十戒 → 使徒信条 → 主の祈り → 聖礼典
- ・ジュネーヴ教会信仰問答(1542)：使徒信条 → 十戒 → 主の祈り → 聖礼典
- ・ハイデルベルク信仰問答(1563)：使徒信条 → 聖礼典 → 十戒 → 主の祈り
- ・ウェストミンスター大小教理問答(1647)：使徒信条 → 十戒 → 聖礼典 → 主の祈り

となっている。ヘボンは幼少の頃より敬虔な信者である母親から、このうちの『ウェストミンスター小教理問答』を暗唱させられているが、本書は『ジュネーヴ教会信仰問答』と同じ順序となっている。このことは何を意味するのだろうか。日本人の心性を意識して、悔い改めに導くことよりも神に祈りを捧げることを前面に出したかったのだろうか。そうだとすると、ヘボンが意識した日本人の心性とはどのようなものであろうか。あるいは、『ジュネーヴ教会信仰問答』は子どもの信仰教育のために執筆されたものであるにもかかわらず、文章としては難解な感じを与える長文であり、全文を暗唱することまでは求められていなかったようである。このことと自分自身が暗唱させられた経験とは何か関係するのだろうか。また最初の問い合わせ(1番)は、人物の第一印象のごとく各カテキズムの特徴を印象づける重要な要素であると思われる所以紹介すると12)。

- ・ルター「あなたは、他の神々を持ってはならない。」
- ・ジュネーヴ「人生の主な目的は何ですか。」
- ・ハイデルベルク「生きている時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは、何ですか。」
- ・ウェストミンスター「人間の第一の目的は、何ですか。」



となっていて、『ウェストミンスター小教理問答』は『ジュネーヴ教会信仰問答』の影響を受けていることがわかる。このことも、本書の順序を、自身の子ども時代から馴染みのある『ウェストミンスター小教理問答』ではなく『ジュネーヴ教会信仰問答』に倣ったことと何か関係があるのだろうか。いずれにしても、導入部としてはどれもが子どもには難しい印象を与えるのではないかと想像する。これに対して本書13)では、

- 一 問 なんぢをつくりしはたれぞや。／答 神なり。
- 二 神はなんぢのほかになにをつくりしや。／神はよろづのものをつくれり。
- 三 神はなにゆゑになんぢとよろづのものをつくりしや。／神おのれのさかえをあらはさんためなり。

と劈頭から続き、子どもの素朴な疑問に答えるような、そして贅肉を削ぎ落として大事なものだけを凝縮したような問答となっている。終わり方にも特徴があり、



- 百三十八 キリストはいまいづくにありや。／つみ人のためにとりなしをなして天にいますなり。
- 百四十 人々死するときはいかになるや。／その屍はつちにかへりたましひは靈の世界にいるなり。
- 百四十三 地ごくはいかなるところぞや。／おそるべきとおはりなきくるしみのところなり。
- 百四十五 天といふはいかなるところぞや。／さかえなるたのしきところでて、たゞしき人の主とともにかぎりなくあらんところなり。

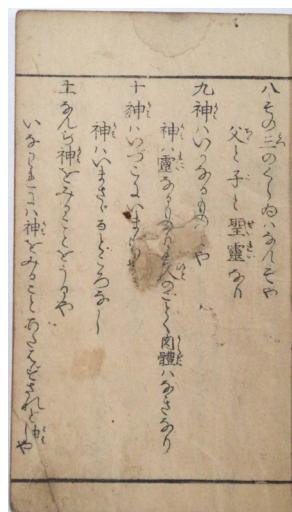
と結んでいる。この問い合わせの立て方は『ウェストミンスター小教理問答』や『ジュネーヴ教会信仰問答』とは全く異なるが、他に範例があったのだろうか、それとも本書独自のものであろうか、興味は尽きない。

次にカトリックの類書との比較を試みたい。カトリック教会は宗教改革の刺激を受

けてトリエント公会議を開催し、独自のカテキズム(『公教要理』)を1566年に出版した。内容は、使徒信条、七つの秘蹟、十戒、祈り、の4つで構成されている。また、本書と同時期のカテキズムとして『聖教要理問答』(1865)、『聖教初学要理』(1868)などがあるが、子ども向きではないので、時代は若干下るが、ラゲ(RAGUET, Emile, 1854-1929)の『小兒ノ公教ノ葉』(1912)<sup>14)</sup>を見ていく。書き出しは、

- 1 問 日ガ照リ月ガ汎エルノハ誰ノ御蔭デアリマスカ。／答 日ノ照ルノモ月ノ汎エルノモ天主様ノ御蔭デアリマス。
- 2 問 稲、麦、木、草ノ出来ルノハ誰ノ御蔭デアリマスカ。／答 稲麦等ノ出来ルノハ天主様ノ御蔭デアリマス。

と始まっており、日本人の自然観を充分に理解した上で書かれたように思える。続いて、



- 15 問 天主様ハ何処ニ在スカ。／答 天主様ハ天ニモ地ニモ何処ニモ在サナイ処ハアリマセン。
- 16 問 天主様ハ目ニ見エマスカ。／答 否ヘ、天主様ハ形ガアリマセンカラ目ニ見エルモノデハアリマセン。
- 17 問 何故天主様ハ形ガアリマセンカ。／答 天主様ハ靈デアリマスカラ形ガアリマセン。
- 18 問 天主様ハ風ノ様ナモノデアリマスカ。／答 否ヘ、風ハ目ニ見エナイケレドモ吹クノガ見エテ肌ニモ當リマス。天主様ハサウデハアリマセん。
- 19 問 天主様ハ匂ノ様ナモノデアリマスカ。／答 否ヘ、匂ハ目ニ見エナイケレドモ鼻ニ嗅ガレマス。天主様ハサウデハアリマセン。
- 20 問 天主様ハ音ノ様ナモノデアリマスカ。／答 否ヘ、音ハ目ニ見エズ鼻ニモ嗅ガレナイケレドモ耳ニ聞コエマス。天主様ハサウデハアリマセん。

となっている。ヘボンの本書が単に、

十一 なんぢ神をみることをうるや。／いな、われには神をみることあたはず、されど神はつねにわれをみるなり。とされているのみであるのに比べ、ラゲの方は易しいだけでなく、詩的で、子どものイメージをどんどんと膨らませるような記述となっているのを感じ取っていただけるであろう。

## 5. おわりに

これまで本書を子ども向けの要理問答書として見てきたが、他方、日本近代文学史上最初の児童文学、という捉え方も一般になされている。問答形式の書物は本来的に、一方的に“教える／教えられる”という関係ではなく、双方に対話の要素が含まれている。日本でも禅問答がよく知られているが、同じ問答でも、禅僧は背を向けて「ソモサン」「セッパ」の掛け声とともに「着いて来られるなら着いて来い」という突き放した感じがし、キリスト教の問答は—ラゲの文献で見たように—正面を向き合って言葉を遣り取りする感じがするのは私だけであろうか。そういう向き合って語り掛ける感じが、本書の児童文学(物語)としての評価にもつながっているとは考えられないだろうか。

本稿は、当文庫の蔵書で、かつ、他に所蔵館も少ない貴重な資料を紹介することで、多くの方に所蔵史資料に興味をもっていただき、その多種多様な研究の端緒となることを目指した。これをきっかけに、研究のさらなる発展へつながれば幸いである。

- 1) カトリック教会の、高橋五郎訳『聖福音書』(上・下)、ラゲ訳『我主イエスキリストの新約聖書』をはじめ、プロテスタントでは、ヘボンとS.R.ブラウンの共同訳、N.ブラウン訳『新約全書』、翻訳委員会訳の旧約・新約の各聖書など、多种多様の和訳聖書を所蔵している。
- 2) 1869(明治2)年に出版条例が公布されて図書出版が許可制となり、1875(明治8)年には許可制から届出制に改正され、発行許可願書に印刷人の住所・氏名を明記することになった。その後数回の改廃を経て、1893(明治26)年には奥付記載が義務付けられた。したがって、明治初期から明治20年頃までは印刷人・印刷所の情報は不確かである。

- 3)小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』(東京大学出版会, 1992)のp.193など。
- 4)そのためか、本書の内容から判断して教理問答書を含む教義(NDC; 191)に分類している図書館と説教集等(NDC; 194)に分類している図書館とがあるのは、図書館員として興味深い。
- 5)「横浜市立図書館デジタルアーカイブ」<http://www.lib.city.yokohama.lg.jp/Archive/> [accessed 2013.10.1]
- 6)諸版とは言うものの、少なくとも本学のものとYとは同じ筆跡に見受けられるため、同じ版本の摺り違い、と言うべきかもしれない。
- 7)しかし、他の例にも見られるように、これは蔵書印・書入れの類を示す角印であって、「耶穌教書肆」は販売書店とも考えられる。同番地は横浜海岸教会(日本基督公会)と同じ場所であるので、教会内に併設された頒布所であろうか。
- 8)来日当初の住まいは、神奈川・成仏寺。日曜日やクリスマスには礼拝が行われたらしい。その住居に近い宗興寺には1861年、施療所を開設。間もなく閉鎖となるが、翌1862年に横浜の外国人居留地三十九番へ住居を移転。ここでは、敷地内の建物の一部が施療所、一部が外国人の宗教的集会所であると同時に、英学塾や、いわゆる日曜学校(「第一日曜学校」として知られている)としても用いられた。
- 9)これに関連して、『和英語林集成』の初版(1867)には登場せず、第3版(1886)から登載されたLoveの訳語としての「愛」という言葉が、早くも本書に見られるのは注目に値する。
- 10)このヘボン塾は男女共学であったが、そのうちの女子部が後にフェリス女学院となり、男子部が紆余曲折を経て明治学院となる。
- 11)1872(明治5)年に太陰暦から太陽暦に変更されるまで、日本では現在のような曜日の概念が無かった。1876(明治9)年に日曜日が休日として制定され、社会生活と信仰の生活とが一致するまでは、「安息日学校」(あんそくにちがっこ)と呼ばれていた。
- 12)『ルター著作集 第1集第8巻』(改訂2版, 聖文舎, 1983)、『ジュネーヴ教会信仰問答』(外山八郎訳, 新教出版社, 1982)、『ハイデルベルク信仰問答』(竹森満佐一訳, 新教出版社, 1961)、『ウェストミンスター小教理問答: 聖句付き』(松谷好明訳, 一麦出版社, 2008)より。
- 13)旧字体は新字体に改めた。
- 14)カトリック文庫所蔵の「1939(昭和14)年第10版」を使用。ただし、旧字体は新字体に改めた。  
なお、これをもとに現在の口語訳として継承されているものとして、『子どものカトリック要理』(<http://hvri.gouketu.com/kodomoyori.htm> [accessed 2013.10.1])がある。

### 【参考文献】

- ・望月洋子『ヘボンの生涯と日本語』(新潮選書)(新潮社, 1987)
- ・高谷道男『ヘボン』(人物叢書, 新装版)(吉川弘文館, 1986)
- ・「ヘボンと横浜: 博士来日120周年記念: 全ページ特集」(市民グラフヨコハマ)31, 1979.10
- ・岡部一興編: 高谷道男, 有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』(教文館, 2009)
- ・「明治初期の日曜学校: 摺籃期の特色」佐野安仁([同志社大学]キリスト教社会問題研究)31, p.29-76, 1983.3
- ・「田村直臣の子ども向け読物における子ども観の変遷: 『童蒙道の栄』から『幼年道の栄』まで」村田幸代(龍谷大学大学院国際文化研究論集)9, p.131-149, 2012.3
- ・鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』(シリーズ・日本の文学史, 1) (ミネルヴァ書房, 2001)
- ・加藤常昭『雪ノ下カテキズム: 鎌倉雪ノ下教会教理・信仰問答』(教文館, 1990)
- ・秋山憲兄『本のはなし: 明治期のキリスト教書』(新教出版社, 2006)

(ISHIDA, Masahisa : 図書館事務課)

## 南山大学カトリック文庫資料の利用について

### 1.「カトリック文庫」の目的

カトリック大学の図書館として相応しいキリスト教関係資料群を構築することにより、近代日本におけるキリスト教史を研究する国内外の研究者に資することを目的とします。

#### <所蔵資料>

- 1.明治・大正・昭和(1970年頃まで)のキリスト教関係出版物等(聖書・祈祷書・聖歌集・要理書およびそれらの解説書・雑誌・新聞・布教資料など)
- 2.東洋(日本)への布教に関する外国側のカトリック関係歴史資料
- 3.教会・修道会刊行物(教会史誌・修道会史誌・布教誌・教区報・教会報など)

### 2.利用対象資料

原則として全ての資料

- ・蔵書検索システム(OPAC)詳細検索の「請求番号」に「CAT\*」  
と入力すると、カトリック文庫の資料が表示されます。
- ・ただし、資料の状態により閲覧をお断りすることがあります。



### 3.利用時間

9:00～閉館30分前

### 4.閲覧・貸出等の手続き

	入 室	閲 覧 (指定の場所)	貸 出	複 写
学園教職員 *1	○	○[カトリック文庫室]	△*4	△*5
学部学生・大学院生				デジタルカメラによる
非常勤講師・研究員・臨時職員等	×	○[B1Fカウンター横]*3	×	撮影のみ
一般利用者(学外者)*2				[B1Fカウンター横]

- \*1.学園教職員は事前の申し込みは不要です。貸出・返却カウンターに閲覧希望の旨、申し出てください。
- \*2.一般利用者(学外者)は閲覧に先立ち「利用登録申請書」の記入が必要です。運転免許証等の身分証明証をご持参ください。紹介状は不要です。
- \*3.学園教職員以外は、事前の申し込みが必要です。
- 閲覧・参考係宛(E-mail:illref@nanzan-u.ac.jp / Fax:052-833-6986)に所属機関、氏名、連絡先、閲覧希望日時、利用目的、利用希望の資料名を明記のうえ、閲覧希望日の2日前(土日祝日、8/6-20,12/24-25,年末年始を除く)までにお申し込みください。
- \*4.学園教職員が貸出を希望する場合は、「特別貸出願書」の提出が必要です。館長決裁後、貸出可否を連絡します。
- \*5.デジタルカメラによる撮影を希望する場合は、「資料撮影願書」の記入が必要です。ただし、資料の状態により撮影をお断りすることがあります(デジタルカメラは利用者本人が持参、フラッシュ不可)。

### 南山大学図書館「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、購入はもとより、多くの皆さまからの貴重な資料の寄贈によって、コレクションを充実させてきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信  
カトリコス No.28 2013.11.1発行  
<http://office.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/>  
発 行：南山大学図書館  
カトリック文庫委員会  
編集委員：石田昌久、加藤富美、  
関谷治代、山田直子  
〒466-8673名古屋市昭和区山里町18  
Phone:052(832)3707/Fax:052(833)6986  
\*図書館Webページでもご覧いただけます。